

前回の会議（８月３１日）において議論された字体の問題につきまして、結論を得るための参考となればと考え、本資料を提出いたします。前回会議で例としてあげられた「嗅」を用います。

	① 改定常用漢字表 社会一般で目にする活字	② 教科書一般活字 明朝体・ゴシック体等	③ 手書き文字 ※教科書体を含めるか否か
【犬】	① 嗅	② 嗅	③ 嗅
【大】	④ [嗅]	⑤ 嗅	⑥ 嗅

字体に関する基準や根拠となるものを、①「改定常用漢字表」（＝社会一般の印刷物等において目にすることの多い字体）とします。そして、教育に適用していく際に、②「教科書一般活字」（＝中学校以上の教科書において多く用いられる明朝体・ゴシック体などの活字）と、③「手書き文字」（＝手書きの文字として指導する際の字体）という二つの段階があるものとします。

①→②→③と移っていく場合、８つの順列がありますが、①→④→⑥のような上昇形を含むものが選択されることは考えられません。選択の対象となるのは、水平形と下降形でできているものだけです。なお、②→④→⑥というルートは、根拠とすることが①→④→⑥とは異なるのですが、④→⑥の部分は同じになるので①→④→⑥に含めます。すると、残るのは次の３つのルートです。

ア：①→③→⑤ イ：①→③→⑥ ウ：①→④→⑥（②→④→⑥を含む）

３つのルートのメリット・デメリット、学習者や指導者から出てくる疑問、必要となる説明などの例として、次のようなことが想定されます。

ア・一貫して「犬」であり、同一字種に関する矛盾が生じない。「嗅」は、書くときにも「犬」がよいという立場。同一部分と見做されるものだと考えられるのに、漢字によって異なることについての説明が必要になる。

・（疑問例）「臭」は「大」なのに、なぜ「嗅」は「犬」なのか？

・（説明例）「表外漢字」から新たに「改定常用漢字表」に加わった漢字は、その多くが「表外漢字字体表」に示されていた字体のまま入ってきている。「嗅」は従来「嗅」と示されてきており、「臭」とは違って「犬」になっている。書くときも（どちらで書いてもよいのだが）、「犬」と書くほうがよい。

イ・活字のレベルでは、「改定常用漢字表」に示されている字体で統一される。活字と手書き文字で字体が異なることについての説明が必要になる。

・（疑問例）教科書に使われている活字は「犬」になっているのに、書くときは、なぜ「大」なのか？

・（説明例）「表外漢字」から新たに「改定常用漢字表」に加わった漢字は、その多くが「表外漢字字体表」に示されていた字体のまま入ってきており、教科書の活字もそれに合わせている。書くときには、（どちらで書いてもよいのだが）「臭」と同様に「大」でよい。

ウ・教育という世界の中では矛盾が生じない。社会一般で多く用いられる活字の字体と、教科書で目にする活字の字体とが異なることについての説明が必要になる。また、国が基準として示したものが教育に反映されない面がある。

・（疑問例）一般の書籍類で目にする「嗅」は「犬」になっているのに、なぜ、教科書では「大」になっているのか？

・（説明例）教科書においては、同一と見做される部分に関して、従来の「常用漢字表」に含まれていた漢字に合わせた活字を使用している。書くときにも、（どちらで書いてもよいのだが）「臭」と同様に「大」でよい。